



吉川高広税理士事務所プレゼンツ 男子プロボウリングトーナメント 2024

5月8～10日
サンスクエアボウル

初Vの藤永北斗 圧巻のひとり旅



▲ひとり別次元のスコアを叩いた藤永「この勢いそのまま3冠を目指したい」

藤永は、予選(12G)最初のシリーズを695でスタートすると、4、5G目は連続パーフェクト。6G目は246で、西村了(2003年に達成)以来2人目の900シリーズはならなかったが、プロで自身初の800シリーズとなる846。さらに第3シリーズ777のあと、最終シリーズも832で、アベは実に268.16。トータル1609ピンで、2位の山本勲にちょうど400ピンの大差をつけた。

準決勝(6G)を経て上位16名が決勝ラウンドロビンに進んだが、そのうち藤永を含む12名がレフティーだった。8名ずつ第I、第IIグループに分かれ総当たり戦7Gを投球し、上位4名を決勝ステップラダーに選出するが、第Iグループに入った藤永は、ここでも2G目にこの大会3個目の300をマークしたほか、7連勝で駆け抜けた。決勝ステップラダーには必ず



▲ほぼ優勝を手中にしていた内藤「内容的によかったため、余計悔しさが込み上げている」



▲これだけ左が上位を占める大会は初めて、この状況をどう思われたかがちょっと気になる」と山本



ちぎりのトップシードの藤永以下、山本勲、大久保雄矢、内藤慎之介のレフティー4人が進んだ。4位決定戦を234:207で大久保を下して勝ち上がった内藤は、3位決定戦で永久シードの20勝に王手がかかっている山本に236:176と快勝して、藤永が待つ優勝決定戦に勝ち進んだ。

同期対決となった優勝決定戦、「練習ボールでしっかり合わせられたはずの左レーンでこすってしまった」と、2、4フレをスペアの藤永に対し、1フレからフォースで先行する内藤は、5フレは⑥⑦と割れてオープン。藤永はすかさず5フレからストライクをつなげて差を詰めるが、内藤も6フレから

再びストライクで応酬。

藤永が9フレ⑦のタップで切れたため、10フレ内藤はスペアで勝ちの状況だったが、痛恨の⑥⑦⑩スプリット。

「5フレのスプリットもそうだけど、とくに10フレはしっかり投げた結果があって、その瞬間は“なんでやねん”と思いました」と内藤。

チャンスをもたらした藤永は、10フレ1投目ストライクのあとの2投目は「こなければ負けなのでしっかり投げようと思ったけど、これまで経験がないほど手が震えて大幅な内ミスをしてしまった」が、ラッキーなピンアクションで、勝利の女神は藤永の方に微笑んだ。

藤永のコメント

大会のオイルパターンを自分のセンターでひいて練習をしたとき、すごく感じがよかったウレタンボールを、これでいこうと決めてきたけど、それがうまくはまったのかなと思う。それ



▲「初優勝がここサンスクエアボウルだったの、いいイメージを持って臨んだ。大久保、上々の開幕戦となった」

にしても連続で300が出たり、3連続でナインコールとか、練習でも経験がないくらいすごくストライクが出た。優勝決定戦は、昨年のラウンドワンJPBA決勝大会で、10フレまで有利に進めながら最後スプリットで負けた経験があったので、ボウリングは最後まで分からないと、諦めずに頑張った。優勝はこれまでに味わったことがないくらいうれしい。

優勝ボール: ブラックパールウレタン ハンマー78D(レジェンドスター)

●優勝決定戦

内藤慎之介	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	30	60	88	107	116	146	176	203	222	231
藤永 北斗	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	20	40	60	80	110	140	169	189	209	238



特別編——米遠征記 Vol.15 report 山下 知且

手が届きかけた川添奨太の夢

PBAワールドシリーズの初戦『ロス/ホルマンダブルス選手権』は、予選PTQを5位でクリアした日本最強の川添・藤井コンビでしたが、二人ともレーンコンディションの変化になかなか対応ができず、残念ながら総合46位で終了しました。さてここからは、皆さんも報道などでご存知だと思いますが、「PBAシャーク選手権」で奮闘し、惜しくも準優勝だった

川添奨太プロのこと、そしてそのときの様子を書きたいと思います。チーターで57位、スコープオンでは100位と苦戦していた川添プロでしたが、シャークが始まる前から「このコンディションは得意なので頑張ります！」と言った彼の姿に、並々ならぬ気合を感じました。予選第1ラウンドの最初の5ゲームを6位で折り返すと、第

2ラウンドでは大きくスコアを伸ばし、10ゲーム2497点でトップに躍り出ます。第3ラウンドでは、惜しくもAJ・ジョンソンに4ピン差でトップを譲りましたが、総合第2位でエリミネーションに進出しました。予選トップのAJ・ジョンソンが1回戦で敗退したので、川添プロは2回戦まで勝てば、トップシードが確定するという状況。1回戦は2-2のまま最終ゲームまでもつれる展開でしたが、最終ゲーム264でナイト・パーチェスに勝ち、2回戦はJ・ピーターズに3連勝し、見事トップシードを決めました。

決勝に残った他のメンバーは、いずれもPBAを代表する顔ぶれで、だれが上がってきて強敵でしたが、優勝決定戦



▲今回で3度目のTV決勝進出だった川添

には昨年ランキングトップのEJ・タケットが進出しました。レーンは、既に練習ボールと3ゲームを消化していたのに加え、ライトなどでかなり変化していたと思います。川添プロは、右のレーンで終始苦勞して、残念ながら213:228で敗れ、準優勝でした。PBAではツアー優勝すると、10年間のシード権やエントリー代が無料になるなど、多くの特権が得られると聞きました。日本人男子初の米本土で

のナショナルツアー優勝を成し遂げ、アメリカで年間を通じて活躍する姿を見たかった。もちろん本人がいちばん悔しかったでしょう。今回のアメリカツアーでは川添プロ、そして安子夫人に大変お世話になりました。わからないことばかりだったので、いろいろと教えていただいて、とても助かりました。そして皆さんのファンに“Shota” “Shota”と声をかけられ、PBAのメンバーたちからも尊敬されている彼を、日本人として本当に誇らしく、頼もしく思いました。

(写真は川添プロ提供)



やました・ともかず
1982年12月5日生まれ、長崎県出身。2000年～2011年ナショナルチーム在籍。2023年6月から長崎県スポーツ協会理事。全日本ボウリング協会理事。2023年4月から長崎県連副理事長。2022年からIBFアスリート委員。



▲川添の悲願は、あと一歩でEJ・タケットを倒すこと(中央はトム・タケット)